



薬師堂

薬師堂
現在は上町公民館となっており、境内には歴代の住僧の墓石と思われる文化4年(1807)の卵塔墓(らんとうぼ)天保10年(1839)の十九夜塔などがある。この薬師堂の本尊は奈良時代の僧である行基(ぎょうき)の作ともいわれ、現在は慈眼寺が保管している。



連行寺

連行寺
元徳元年(1329)、日秀上人の開基で、一節には日行上人の創建ともいわれる。徳川將軍の日光社参の際には、宇都宮城主がこの寺で控え、迎えるのが例であった。



金井神社

金井(かない)神社
小金井宿の鎮守。江戸時代には北進社あるいは北進宮と呼ばれ、慈眼寺が別当を努めた。本殿は一間社三方入母屋造りという建築様式で壁面には天保・嘉永期(1830~50年代)の制作と推定される。壮麗な壁画彫刻があり、各彫刻には小金井宿の商家の女性と思われる人名が刻まれている。境内社として八坂神社、雷電神社、天満宮、交通安全社(旧疱瘡神)がある。

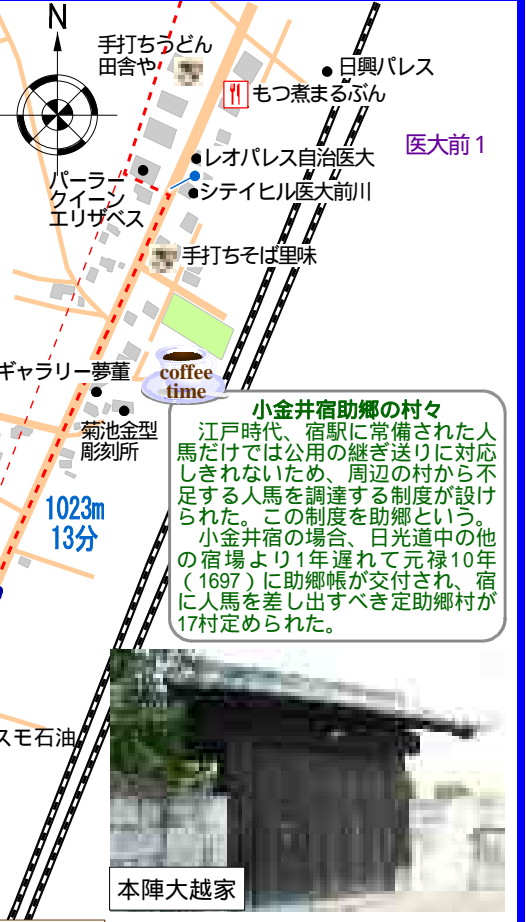


領主陣屋跡(菅井製菓)

領主陣屋跡
領主陣屋は佐倉藩の出張陣屋(でばりじんや)。現在は菅井菓子店となり、同家は陣屋と直接関係はないものの、陣屋の代官(出役)を努め、明治以降もこの地に移住した大槻氏の位牌を今も祀っている。

小金井戸
この道は、日光道中略記に「地名の起りには、宿の西、磯宮の辺に小金井と名づけし井あるを以て金井村となへしが、後に小の字を加へ、宿駅となりてより宿と新たむ」「...小池なれども井の名あり。その水清瑩瑩(せいえい)にして、大旱にも枯るゝ事なし。此水中より黄金を得たりと云」。さらに日光・奥州・甲州道中宿村大概帳には「宿の往還より五町程引込、磯ノ宮権現有レ之、境内に小金の井と号候古井有レ之」とあり、將軍家光が日光社参の際、御膳水にも使われたという。今は運動公園になり、井戸や磯宮の位置は特定できない。

47 小金井宿 ~ 石橋宿
栃木県下野市
小金井 ~ 自治医大
(歩行距離 1843m 24分)
歩く地図でたどる日光街道
<http://nikko-kaido.jp/>
JZE00512@nifty.ne.jp



14 小金井宿

小金井宿は、江戸から14番目の宿場。日光・奥州・甲州道中宿村大概帳では、町並みの長さが6町42間(約730m)、家が165軒(旅籠43軒、本陣・脇陣・問屋場が各1軒)、宿の人口は767人(男374人、女393人)、駄賃・賃銭 荷物一駄・乗掛荷人共67文、軽尻馬1疋43文、人足1人33文でした。
江戸時代後期以降には、宿と周辺の村々を領地とした佐倉藩(千葉県佐倉市)の出張陣屋が置かれていた。また、街道沿いにはわずかに宿の面影を残しており、江戸時代の姿をとどめる一里塚も残っている。日光道中略記には「むかしは人家も磯宮のあたりにありしが、元和年中(1615~1624)日光街道ひらけしより次第に往還の左右に移り住みしといふ。延宝9年(1681)より宿駅の数に入りて」とあり、宿駅となったのはかなり後のこと。

石橋現
国道から西に約400m、下野市国分寺庁舎東方に隣接した林の中に、中世の五輪塔一基が佛屋の中に祀られている。

小金井宿助郷の村々
江戸時代、宿駅に常備された人馬だけでは公用の継ぎ送りに対応しきれないため、周辺の村から不足する人馬を調達する制度が設けられた。この制度を助郷という。小金井宿の場合、日光道中の他の宿場より1年遅れて元禄10年(1697)に助郷帳が交付され、宿に人馬を差し出すべき定助郷村が17村定められた。



本陣大越家

小金井宿旧本陣跡(大越家)
本陣跡を示す四脚門が残されている。この旧本陣には、明治22年(1889)に国分寺村が発足したとき、村役場が置かれていた。



旧日光道中 現在の国道から西に新田と呼ばれた江州時代は、うっそうと大木が並立していた。一部は耕地に埋もれ、農道折れが石橋町につきあたり、消滅する。



見世蔵

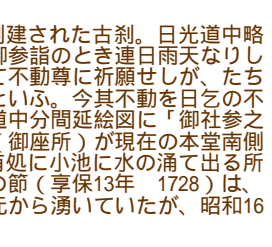
見世蔵旧小金井宿の町並み
国道沿いに宿場の面影はほとんど見られないが、小金井宿の中心部には幕末から明治初期に建てられたという2棟の見世蔵(呉服屋)が残されている。



観音堂



慈眼寺



鐘楼

俳諧の句碑
文化4年(1807)に建てられた後期の俳人谷素外や小金井宿の12人の俳人の発句などが刻まれている。この場所にあった旅籠蔵田屋(大越家)敷地の奥にあったが、今は国道沿いに移されている。

慈眼(じげん)寺
上野国の豪族である新田義兼により建久7年(1196)に創建された古刹。日光道中略記に「建久7年(1196)の起立なり、慶安2年(1649)日光御参詣のとき連日雨天なりしかば、晴れを祈るべしとの命ありしより、住僧丹誠を拙て不動尊に祈願せしが、たちまち快晴す。此時の常として寺領式拾石の御朱印を賜へりといふ、今其不動を日乞の不動と称す」とある。江戸時代の観音堂と鐘楼が残る。日光道中分間延絵図に「御社参節御昼休所」とあり、將軍社参の際に使用され、御成御殿(御座所)が現在の本堂南側にあったと伝えられる。「宿の内に慈眼寺と云、裏2町程有処に小池に水の湧てる所あり。流れ絶る事なく4、5丁の田にかゝる。享保の御社参節(享保13年 1728)は、御上り水に成すと。これ小金井也」とある。ツゲの木の根元から湧いていたが、昭和16年頃(1941)の農地工事で水が出なくなった。